
玖珠町観光振興基本計画

観光資源を守り、活かす力で、地域経済を活性化する

計画期間：令和8年度（2026年度）～ 令和12年度（2030年度）

玖珠町

目次

第1章 計画の趣旨と位置づけ

- 1-1 計画策定の背景
- 1-2 計画策定の趣旨
- 1-3 計画の位置づけ
- 1-4 計画の期間
- 1-5 持続可能な観光地域づくりへの貢献

第2章 玖珠町観光の現状と課題

- 2-1 デジタル観光統計の導入について
- 2-2 観光客の来訪実態（発地・属性分析）
- 2-3 エリア別滞在時間の実態（消費機会の可能性）
- 2-4 周遊動態の分析（拠点間連携の可能性）
- 2-5 玖珠町観光の課題（SWOT分析）

第3章 基本理念とめざす姿

- 3-1 基本理念
- 3-2 めざす将来像
- 3-3 計画の目標（指標の設定）

第4章 玖珠町の魅力を支える3つの主要領域

- 4-1 賑わいと交流の町の玄関口（豊後森エリア）
- 4-2 物語が息づく歴史と文化（森まちなみエリア）
- 4-3 豊かな自然と風景（自然景観エリア）
- 4-4 主要領域（3つの柱）の概要一覧

第5章 基本方針と具体的施策

- 5-1 方針1 おもてなしと人づくり（人材育成・受入環境）
- 5-2 方針2 資源と体験の磨き上げ・周遊の強化（コンテンツ・交通）
- 5-3 方針3 情報発信と広域連携（プロモーション・広域観光）
- 5-4 方針4 文化・暮らしとの共生と継承（持続可能性）

第6章 計画推進体制

- 6-1 協働による推進体制と役割分担
- 6-2 観光による経済循環の最大化
- 6-3 進行管理と評価（改善サイクルの確立）

おわりに

第1章

計画の趣旨と位置づけ

1-1 計画策定の背景

(1) 玖珠町の観光資源とその可能性

玖珠町には、全国に誇れる観光資源があります。

かつて国鉄久大本線の鉄道輸送を支えた豊後森機関庫は、扇形に広がる鉄筋コンクリート造りの堂々たる姿が往時の記憶を今に伝え、鉄道ファンのみならず多くの人々を惹きつけています。テーブル状の独特な山容（メサ、ビュート）を持つ伐株山や万年山は、この土地でしか出会えない風景です。城下町の面影を残す森のまちなみには、森藩主久留島氏の歴史が息づいています。そして、その末裔である久留島武彦の功績を顕彰する「童話の里」の精神は、玖珠町全体のまちづくりの根底に受け継がれています。

これらの資源は、先人たちが守り、受け継いできたものです。そして今、この財産を次の世代へ引き継ぎながら、町の活力として「活かす」ための戦略が求められています。

(2) 社会情勢の変化

人口減少・少子高齢化が進行するなか、幅広く消費と雇用を生み出す観光産業の振興が、持続的な地域の成長と発展のために重要な役割を果たしています。

近年、新型コロナウイルス感染症の収束に伴い観光需要は急速に回復していますが、旅行者の価値観は大きく変化しています。従来の団体旅行や物見遊山型の観光から個人旅行を中心とした体験型へ変わり、結果としてその土地ならではの物語や特別な体験を求めるニーズが定着し始めています。この変化は、独自の歴史と自然を持つ本町にとって、大きな追い風となり得るものです。

(3) 国の動向

国においては、観光立国推進基本計画（第4次・令和5年閣議決定）において、「持続可能な観光」「消費額拡大」「地方誘客促進」の3つをキーワードに掲げ、持続可能な観光地域づくり、インバウンド回復、国内交流拡大の3つの戦略に取り組むこととしています。また、量（人数）から質（消費額）への転換が重視されるとともに、観光DXの推進やデータに基づく観光地経営が後押しされています。

(4) 大分県の動向

大分県においても、第2期日本一のおんせん県おおいたツーリズム戦略に基づき、稼げる観光地域づくりや受入環境の充実を掲げ、ポストコロナ時代に向けた新たな魅力創出や、旅行者・事業者・地域住民の相互理解による持続可能な観光の実現に向けた取組が進められています。

(5) 本町の現状

こうした社会の変化を踏まえ、本町の実態を見つめ直すと、地域経済の縮小や担い手不足により、交流人口の拡大による地域活性化が必要な状態です。

本町は豊後森機関庫公園や伐株山、森のまちなみといった独自の有力な観光資源を有しながらも、その活用は特定エリアでの短時間の見学に留まっています。宿泊や飲食・物販といった地域経済への波及効果が十分に発揮されていないことが、デジタル観光統計によって明らかになりました（詳細は第2章）。

また、従来は行政や事業者の経験に基づく観光振興が中心であり、客観的なデータと来訪者視点に基づいた戦略的な観光地経営への転換が求められています。

1-2 計画策定の趣旨

このため、本計画は、多様化する旅行ニーズや環境の変化に柔軟に対応すべく、行政や観光協会、観光関連事業者、商工会のみならず、町民や各種団体が一体となって観光振興を図るための指針として策定するものです。

1-3 計画の位置づけ

本計画は、本町の最上位計画である「玖珠町第6次総合計画（後期基本計画：令和8年度～令和12年度）」における観光分野の個別計画として位置づけます。

また、「第3期玖珠町まち・ひと・しごと創生総合戦略（令和7年度～令和11年度）」等の関連計画との整合性を図りながら、本町の目指すべき観光の将来像を共有し、一体となって観光地域づくりを推進するための共通の指針として位置づけます。

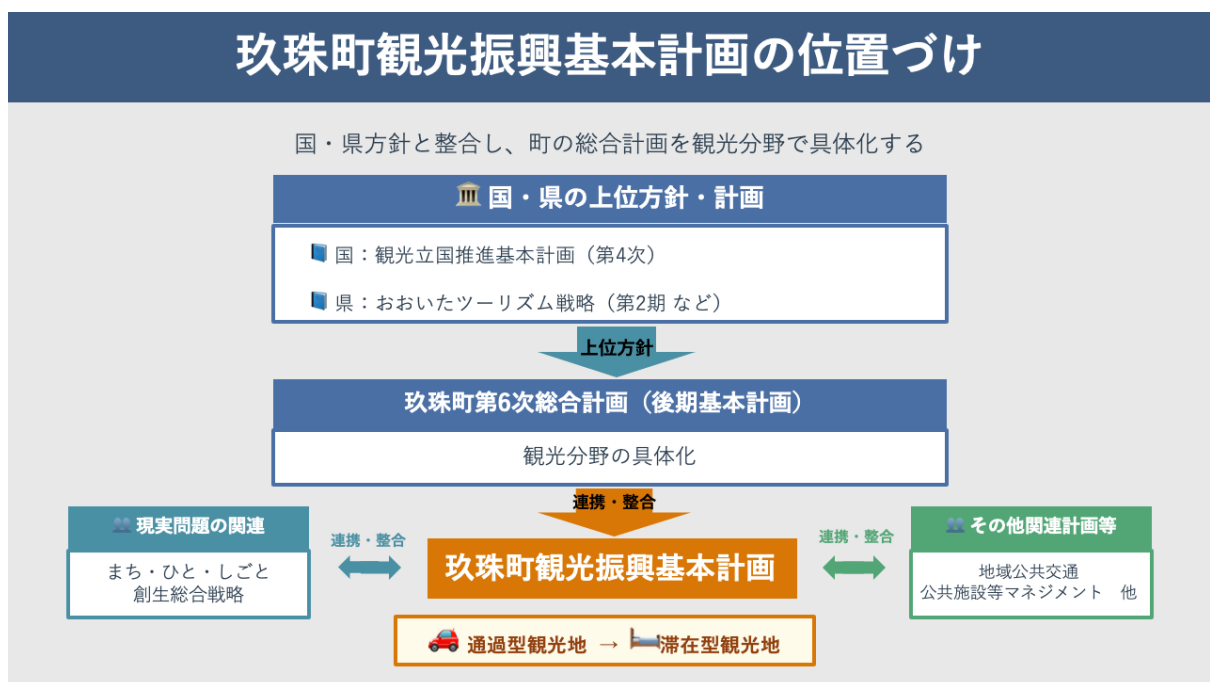


図 1-1 玖珠町観光振興基本計画の位置づけ

1-4 計画の期間

本計画の期間は、2026年度（令和8年度）から2030年度（令和12年度）までの5年間とします。なお、計画の推進にあたっては、社会情勢の変化や観光動向の推移、施策の進捗状況等を踏まえ、必要に応じて見直しを行うものとします。

1-5 持続可能な観光地域づくりへの貢献

国際的な目標である持続可能な開発目標（SDGs）の視点は、観光地経営においても不可欠となっています。本計画では、慣例や形式にとらわれることなく、地域の自然・文化を守りながら活用することや、観光による雇用創出と経済循環といった、本町の実質的な持続可能性に寄与する取組を推進します。

第2章

玖珠町観光の現状と課題

2-1 デジタル観光統計の導入について

本計画の策定にあたり、従来の経験則や主観的な判断から脱却し、客観的な根拠に基づく政策立案（EBPM）を推進するため、携帯電話の位置情報等のビッグデータを活用したデジタル観光統計を導入しました。

これにより、従来の調査では把握が困難であった来訪者の居住地、エリアごとの詳細な滞在時間、町内周遊ルートの実態を可視化することが可能となりました。本章では、このデータに基づき、本町観光の構造的な特徴と、そこに潜む可能性を明らかにします。

2-2 観光客の来訪実態（発地・属性分析）

2024年（令和6年）のデジタル観光統計における分析の結果、本町への来訪者は福岡県（特に福岡市・久留米市）および県内（大分市・別府市・中津市）が過半数を占めています。

これは、大分自動車道や国道を有し、福岡都市圏から約90分というアクセスの良さを裏付けています。一方で、関東・関西圏等の遠方や、海外からの個人旅行者のシェアは依然として低く、広域観光ルートにおける通過点として利用されている実態が示唆されます。

この結果は、本町の主要ターゲットが明確であることを意味しています。まずは福岡・県内近隣層に対して、通過ではなく滞在を促す施策を集中的に展開することが、最も効果的な施策であると考えられます。

図表 2-2：居住地別来訪者シェア（2024年実績）

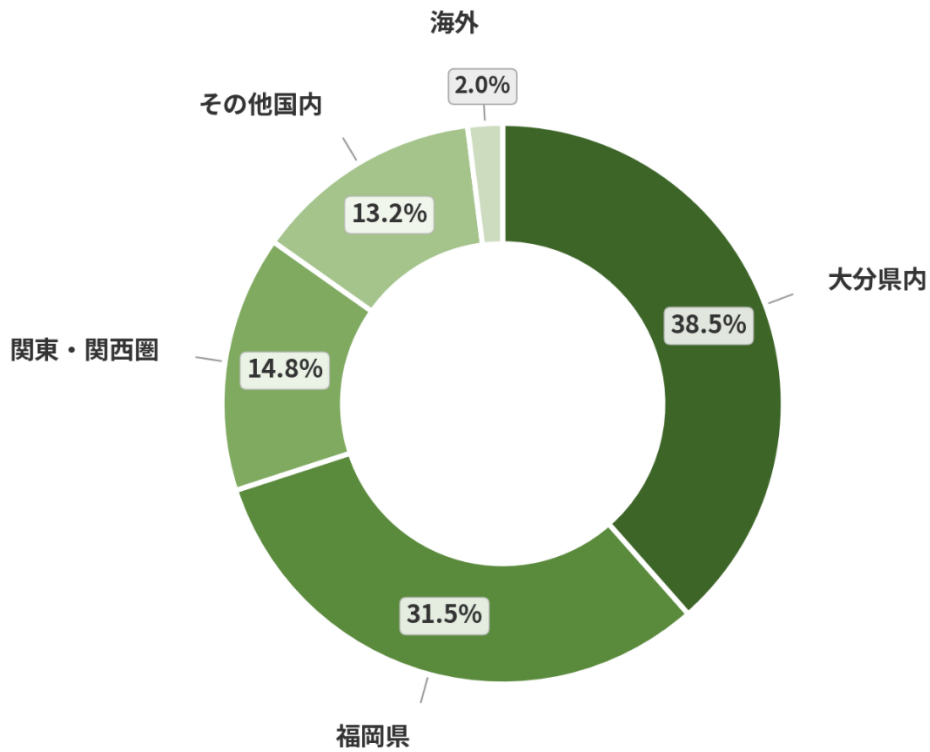


図 2-2 居住地別来訪者シェア（2024 年実績）

2-3 エリア別滞在時間の実態（消費機会の可能性）

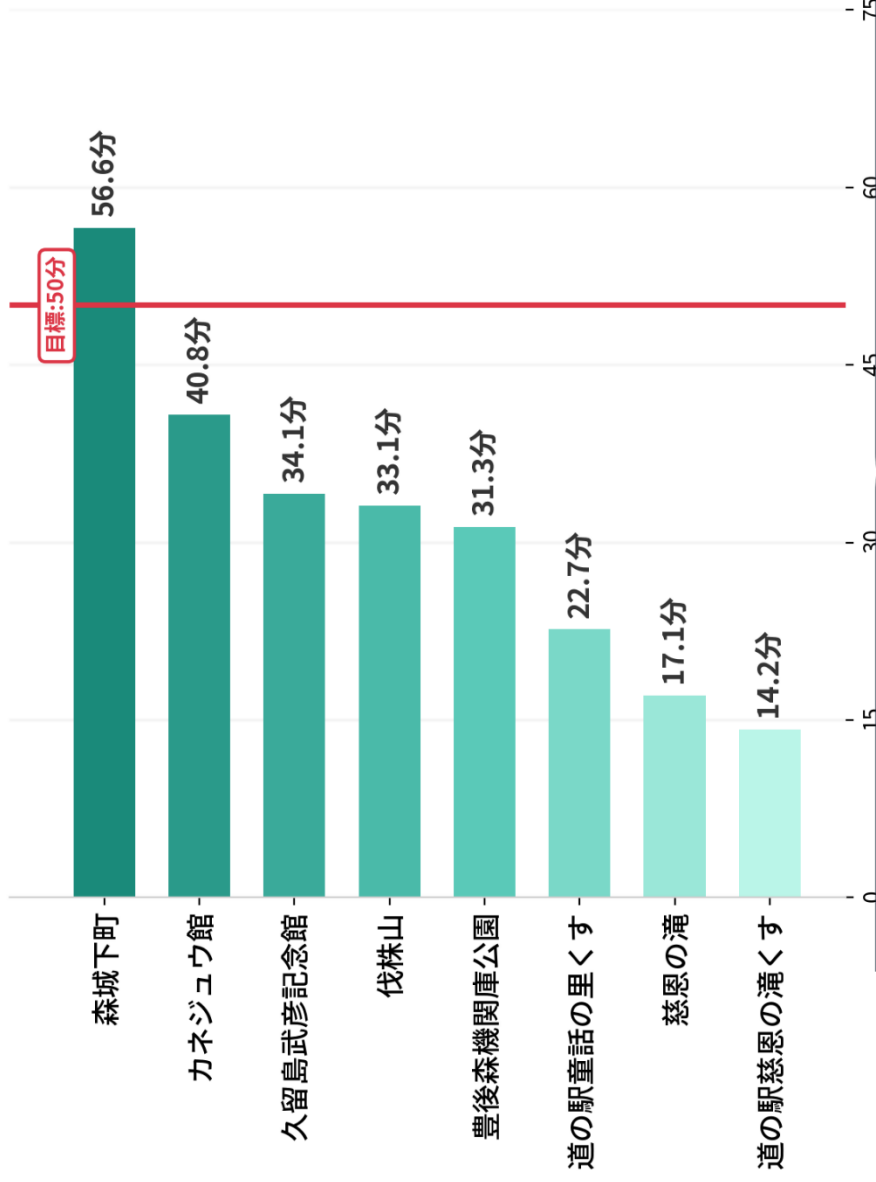
町内指標とするエリアの滞在時間を分析したところ、多くの地点で滞在時間が短く、飲食や体験といった消費行動に結びつく時間を確保できていない実態が明らかとなりました。

本計画では、来訪者が食事や体験を行い、地域内で消費活動を行うための滞在時間の目安を概ね 50 分から 90 分程度と想定しますが、本町の観測地点の多くはこの水準に達していません。指標とする 8 箇所（森城下町、カネジュウ館、久留島武彦記念館、伐株山、豊後森機関庫公園、道の駅童話の里くす、慈恩の滝、道の駅慈恩の滝くす：次頁に詳細を記載）の平均滞在時間は、約 31 分に留まっており、この全体水準を引き上げることが必要です。視点を変えると、滞在時間を延ばす仕掛けを行えば、既存の来訪者から新たな消費を生み出せる可能性があるということです。

指標とする8箇所の平均滞在時間（2024年）

デジタル観光統計の分析により、観光客の多くが短時間の滞在にとどまっている現状が判明。消費拡大には滞在時間を「50分以上」に延ばすことが課題。

指標8箇所別 平均滞在時間（2024年実績）



指標8箇所の平均滞在時間は約31.3分。

消費行動の目安である50分に大きく及ばず、全体の底上げが急務です。

「50分の壁」が消費のボトルネックに。

食事や体験などの消費行動を促すには、50分以上の滞在が必要です。

2030年に向けた転換の方向性

消費行動の目安：50分以上

現状平均 2030目標

31.3分 → 50分

森城下町（56.6分）のみ達成。
他7箇所の底上げが鍵。

50分を超えと何がかわるか

飲食や体験といった消費行動が発生する
滞在時間の目安が「50分以上」です。

滞在延長 → 消費増加 → 地域経済への波及

「通過型」から「滞在型」観光への

シフト

単なる経由地ではなく、目的地としての
滞在への転換を図ります。

指標とする8箇所別 平均滞在時間の実態【2024年（令和6年）実績】

| エリア区分 | 指標とする8箇所 | 現状と転換の方向性 |
|--------------|--|---|
| 豊後森 エリア | 豊後森機関庫公園 (滞在約30分・ 年間約5.4万人) | 町を代表する象徴的遺産。現状は写真撮影中心の短時間滞在だが、周辺施設との接続により滞在・消費への転換が見込める。鉄道遺産としての物語性を活かした体験事業の開発が、滞在延長の鍵となる。 |
| | 道の駅童話の里 くす (滞在約23分・ 年間約38万人) | 町内最大の集客力を持つ拠点。現状は短時間の立ち寄りを中心だが、町内誘導の最大の起点となり得る。ここから森まちなみエリアや自然景観エリアへの周遊動線を確立することが、計画全体の成否に及ぼす影響となる。 |
| 森まちなみ エリア | 森城下町 (滞在約57分・ 年間約3.7万人) | エリア全体での散策により、町内で最も長い滞在を確保できている。滞在型観光のモデルケース。「歩いて楽しむ」まちなみの価値を、他エリアの回遊促進にも活かしていく。 |
| | カネジウ館 (滞在約41分・ 年間約1,800人) | 森まちなみ情報発信施設として、観光客の流入等によりにぎわいを取り戻し、地域の商業振興を図る施設。 まちなみ散策の拠点として、相乗効果が期待できる。 |
| | 久留島武彦 記念館 (滞在約34分・ 年間約6,700人) | 久留島武彦を顕彰する施設。来館者に対して個別案内を行っており、体験価値を重視した「こと消費」の取組を行っている。「童話の里」の精神を体現する場として、物語性の発信強化により滞在延長の可能性が高い。 |
| 自然・景観 エリア | 伐株山 (滞在約33分・ 年間約1.5万人) | 独自の絶景資源には定評がある。眺望後の滞在を促す体験や飲食の仕掛けが必要となる。 |
| | 慈恩の滝 (滞在約17分・ 年間約5.5万人) | 年間5万人超の集客力がある。涼しさとマイナスイオン効果、隣接スポットとの連携による滞在延長の可能性が高い。 |
| | 道の駅慈恩の 滝くす (滞在約14分・ 年間約11万人) | 滝の見学に伴う立ち寄り施設。慈恩の滝との一体的な滞在環境の整備により、消費への接続を図る。 |

2-4 周遊動態の分析（拠点間連携の可能性）

位置情報データの分析により、以下の特徴が確認されました。

(1) 広域観光における窓口としての優位性

福岡、玖珠、由布院・別府を結ぶルート上に位置しており、本町が北九州エリアの広域観光における重要な経由地であることがデータによって裏付けられました。この地理的優位性は、広域連携において本町が果たせる役割の大きさを示しています。

(2) 町内周遊における伸びしろ

豊後森機関庫公園、道の駅童話の里くす、森城下町、伐株山といった各拠点は、それぞれが高い集客力を持っています。しかし、拠点間の相互移動は限定的であり、来訪者は特定の1地点のみを訪れて町を離れる傾向が見られます。

なかでも、年間38万人超が訪れる道の駅童話の里くすと、観光目的の来訪者が集まる豊後森機関庫公園は、本町における2大集客拠点です。この2つの拠点から、森まちなみエリアや自然景観エリアへと来訪者を送り出す周遊の仕組みを整えることが、町全体の滞在時間延長と経済効果拡大の鍵となります。

2-5 玖珠町観光の課題（SWOT分析）

ここまでのデータ分析を総合すると、本町の観光における構造的な特徴が浮かび上がります。

本町の最大の課題は、道の駅などで確保できている来訪者の「数」を、町内での観光や消費といった「質」に転換できていないことです。しかしこれは同時に、既存の来訪者を町内へ誘導する仕組みさえ整えれば、新たな投資で集客数を増やさずとも、大きな経済効果を生み出せる可能性を意味しています。

以下のSWOT分析は、この構造的特徴を整理したものです。

※SWOT分析：強み・弱み（内部）と機会・脅威（外部）を整理し、現状把握や課題整理のうえで重点施策の方向性を導く手法。

| 分類 | プラス要因（促進） | マイナス要因（抑制） |
|------|--|---|
| 内部要因 | <p>【強み】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・豊後森機関庫公園、伐株山といった象徴的資源 ・年間30万人を超える道の駅の集客力 ・主要都市と結ぶ良好な交通アクセス | <p>【弱み】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・道の駅来訪者を町内観光へ誘導できていない導線の不足 ・拠点間（町内観光地）の相互回遊が弱い ・指標とする8箇所の平均滞在時間が約31分にとどまり、消費行動に必要な水準に達していない。 |

| 分類 | プラス要因（促進） | マイナス要因（抑制） |
|------|---|--|
| 外部要因 | <p>【機会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体験型観光（コト消費）への需要増 ・周辺観光地（由布院、日田等）からの流入 ・デジタル技術（DX）活用による効率化 | <p>【脅威】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・近隣の有名観光地への素通り（通過） ・事業者の高齢化と担い手不足 ・災害による交通網の分断リスク |

第3章

基本理念とめざす姿

3-1 基本理念

観光資源を守り、活かす力で、地域経済を活性化する。

本町の観光振興における絶対的な指針として、この理念を掲げます。

理念の背景と意義

「守る」と「活かす」の両立

観光振興において、資源との向き合い方には大きく二つの方向があります。一つは、集客を優先し、資源を消費的に使用する方向。もう一つは、保存を重視するあまり、資源の可能性を十分に引き出せない方向です。本町が目指すのは、そのどちらでもありません。

先人から受け継いできた資源を、敬意をもって「守る」こと。そして、その資源を現代の来訪者のニーズに合わせて「活かす」知恵と工夫を重ねること。この二つの力を両立させ、その成果を確実な地域経済の活性化へとつなげていきます。

豊後森機関庫や伐株山、森のまちなみといった、かけがえのない資源を「守る」ことは、町のアイデンティティを維持することと同義です。しかし、守るだけでは持続可能性は確保できません。これらの資源を活かし、交流人口の拡大を確実な経済効果へと結びつける。得られた収益を、資源のさらなる保全と住民の豊かさに還元していく。この「守り、活かす」好循環こそが、本町が目指す観光振興の姿です。

理念に照らした現状認識

この理念を出発点として、第2章で明らかになった本町の現状を振り返ります。

「守る」観点から見れば、本町には全国的にも貴重な観光資源が数多く存在しています。国天然記念物の大岩扇山をはじめ国指定名勝の耶馬溪や旧久留島氏庭園、国史跡の角牟礼城跡、国の登録有形文化財である豊後森機関庫、独特の山容が来訪者を惹きつける伐株山と万年山、歴史的な風情が色濃く残る森のまちなみ、童話の里としての文化的蓄積。これらは、先人たちの営みが今日まで守り伝えてきた、まさに玖珠町の宝です。

一方、「活かす」観点から見ると、課題は明確です。デジタル観光統計が示すとおり、指標とする拠点の平均滞在時間は約31分にとどまっています。豊後森機関庫公園で約31分、道の駅童話の里くすで約23分、森城下町では約57分と比較的長いものの多くの来訪者が「見て、写真を撮って、帰る」という通過型の行動にとどまっていることが実態です。

つまり、資源の豊かさに比して、その魅力を十分に来訪者に届け、地域にお金が巡る仕組みが追いついていないのが現状です。不足しているのは集客力ではなく、来訪者を迎え入れ、町の魅力にじっくり触れてもらい、その感動が地域経済の循環につながる仕組みです。

資源を守ることで町の価値を維持し、活かすことでその価値を経済的な力に変える——この両輪を回し続けることが、本町の観光振興の根幹であり、そのための本計画です。

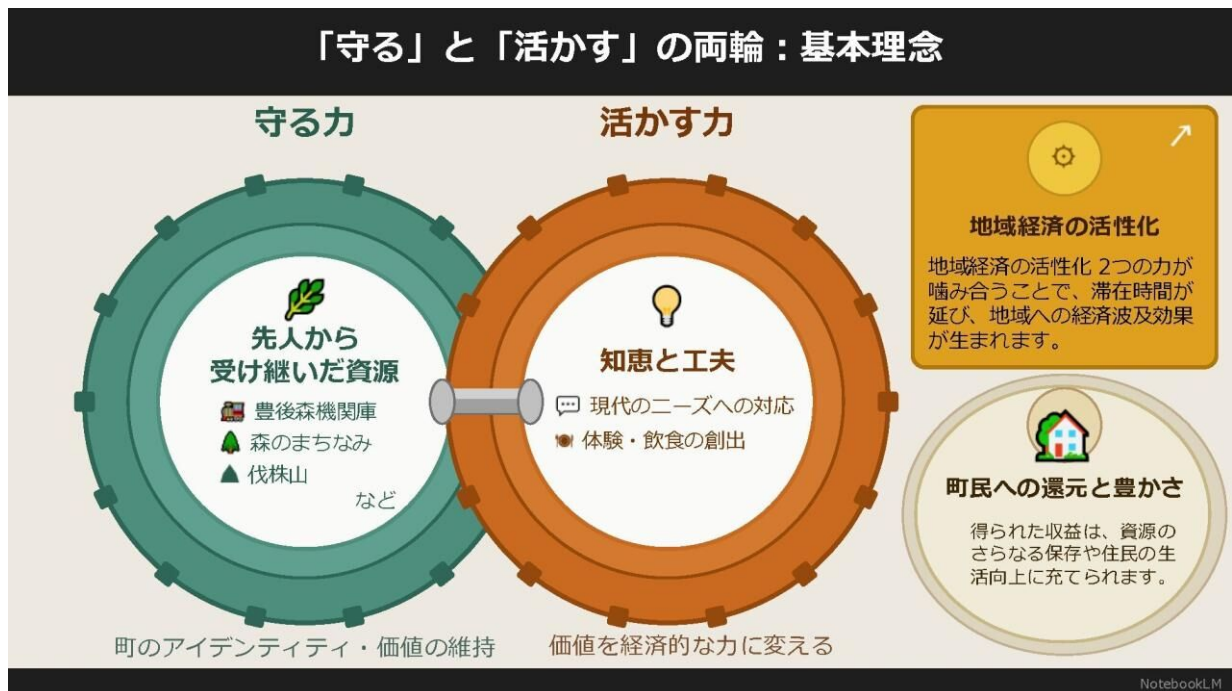


図 3-1 「守る」と「活かす」の両輪：基本理念

3-2 めざす将来像

「ちょっと寄る町」から「わざわざ訪れる町」へ

デジタル観光統計によって明らかになった「短時間での立ち寄り（通過型）」という現状を真摯に受け止め、本町が広域観光ルートにおける単なる通過点ではなく、独自の価値を持つ「目的地」として選ばれる姿を目指します。

この転換を実現するために、以下の3つの方向性を掲げます。

(1) 滞在時間の延長と満足度の向上

各拠点の魅力を深掘りし、見学だけで終わらない体験や飲食の機会を創出することで、来訪者が腰を落ち着けて町を楽しめる環境を整えます。

(2) 拠点間連携による回遊性の向上

豊後森機関庫公園や道の駅童話の里くす等の特定の拠点に集中する来訪行動を、町なか及び周辺地の自然・歴史資源へと戦略的に誘導します。あわせて、拠点間を結ぶ動線（移動手段、回遊ルート、案内・サイン等）を確保・強化し、周遊行動の促進による面的な観光地形成を図ります。

(3) 経済循環の最大化

来訪者の滞在が長くなることで、町内での消費機会を増やし、観光による収益が地元の事業者や生産者に広く行き渡る健全な経済循環を構築します。

将来像の実現に向けて——4つの基本方針

上記の将来像に到達するため、本計画では4つの基本方針を設定します。これらは基本理念の「守る力」と「活かす力」を具体的な行動につなげるための柱であり、すべてが相互に関連しながら本町の観光振興を推進します。

| 方針 | 方針名 | 概要 |
|-------|------------------|--|
| 基本方針1 | おもてなしと人づくり | 住民や事業者が誇りを持って来訪者を迎え入れる体制を構築し、持続可能な観光地経営を担う人材を育成します。 |
| 基本方針2 | 資源と体験の磨き上げ・周遊の強化 | 既存の観光資源をさらに磨き上げ、滞在時間の延長につながる体験・飲食メニューを創出するとともに、拠点間の回遊を促す仕組みを整備します。 |
| 基本方針3 | 情報発信と広域連携 | 本町の魅力を的確に届けるため戦略的な情報発信を強化し、近隣自治体との連携により広域的な誘客力を高めます。 |
| 基本方針4 | 文化・暮らしとの共生と継承 | 観光と地域の暮らし・文化が調和する形で発展し、次世代へと受け継がれる持続可能な観光のあり方を追求します。 |

各方針に基づく具体的な施策と事業の詳細は、第5章「基本方針と施策の展開」において体系的に展開します。

3-3 計画の目標（指標の設定）

本計画では、デジタル観光統計の強みを活かし、進捗を客観的に管理します。

なお、本町がデジタル観光統計を導入したのは本計画策定にあたってのことであり、一部の指標については現時点で基準値が確立していません。こうした指標については、測定体制の整備を検討し、計画期間内に基準値を設定することを目標に組み込んでいます。

| 指標区分 | 指標項目 | 現状値 (2024年度) | 目標 (2030年度) | 指標の意義と管理方法 |
|------|---------------------|-----------------|----------------|---|
| 重点指標 | 拠点平均滞在時間 | 約31分 | 50分以上 | 食事や体験への接続を評価する最重要指標。デジタル統計により継続的に測定します。 |
| | 指標とする8箇所の平均滞在時間の延伸幅 | | 10分以上の延伸 | 全体平均の底上げを管理するための指標。個別拠点の改善状況をデジタル統計で追跡し、施策効果を検証します。 |
| 周遊指標 | 町内複数地点の周遊率 | 測定手法の確立段階 | 基準値の設定と改善 | 特定の拠点から他エリアへの移動割合を測定し、周遊促進施策の効果を測ります。 |
| 規模指標 | 来訪者数 | 約86万人 | 維持または微増 | 数値の変化のみの追求ではなく、満足度を維持できる適切な規模を維持します。 |

| 指標区分 | 指標項目 | 現状値 (2024年度) | 目標 (2030年度) | 指標の意義と管理方法 |
|------|---------------|-----------------|----------------|---|
| 経済指標 | 観光消費額 (推計) | 測定体制の構築 | 調査の実施と 増加 | 本計画期間中に、アンケートや経済センサス等を活用した「町独自の消費額推計手法」を確立し、経年変化を追跡します。 |

第4章

玖珠町の魅力を支える3つの主要領域

本町が有する多様な観光資源を、来訪者の目的や資源の特性に合わせて、以下の3つの主要領域に整理します。

この3つは、それぞれ異なる魅力を持ちながらも、「玖珠町でしか出会えない価値」という点で共通しています。鉄道遺産が語る近代の記憶、森城下町に息づく物語、そして大地が悠久の時をかけて創り出した風景——いずれも他の地域では代替できない、本町固有の財産です。これらを観光振興の柱として位置づけ、重点的な磨き上げと情報発信を行います。

4-1 賑わいと交流の町の玄関口（豊後森エリア）

昭和の時代、豊後森は九州の鉄道輸送を支える要衝でした。扇形に並ぶ機関庫は、かつて蒸気機関車が行き交い、人と物資が集まる活気ある拠点であったことを今に伝えています。鉄道の時代が移り変わった後も、この鉄筋コンクリート造りの遺産は風雪に耐えて残りました。それは、町の人々がこの場所に刻まれた記憶を大切にしてきた証でもあります。

豊後森機関庫公園を中心とする本エリアは、JR 豊後森駅や道の駅童話の里くすを含む、本町観光の入口となる領域です。町外からの来訪者を最初に迎え入れ、町全体へと送り出す結節点（ハブ）の役割を担います。

第2章で示したとおり、本エリアは強力な集客力を持ちながらも、滞在時間が短いという課題があります。周辺の商店街や飲食施設との接続を強化し、見学から滞在・消費へとつなげる仕組みづくりを最優先に進めます。

4-2 物語が息づく歴史と文化（森まちなみエリア）

森地区には、江戸時代から続く城下町の風情が今も残っています。この地を治めた久留島氏は、藩政の傍ら文化を重んじ、その精神は後に「日本のアンデルセン」と称される久留島武彦へと受け継がれました。武彦が生涯をかけて子どもたちに届けた物語の数々は、「童話の里くす」の原点であり、今なお町の誇りとして息づいています。

本エリアは、城下町の風情が残る森地区のまちなみや、旧久留島氏庭園、久留島武彦記念館など、本町の歴史と文化を象徴する領域です。第2章のデータが示すとおり、エリア全体での散策により町内で最も長い滞在時間を確保できており、滞在型観光のモデルケースとなっています。

この強みをさらに伸ばし、地域の歩みや物語を深く伝え、知的好奇心を満たす体験を提供します。また、これらの歴史的資源を観光に活用するだけでなく、その収益を資源の保存や文化継承の支援へと繋げる循環を構築します。ガイドによる案内や、まちなみの散策環境を整えることで、来訪者が地域の歴史に深く触れられる、質の高い滞在空間を目指します。

4-3 豊かな自然と風景（自然景観エリア）

珍珠盆地を見下ろすテーブル状の台地——伐株山や万年山の独特な山容は、長い歳月をかけて地殻変動と浸食が生み出したものです。この土地でしか出会えない風景は、訪れる人に驚きと静かな感動を与えます。山頂から広がるパノラマの眺望や崖を流れ落ちる慈恩の滝の水音それらはすべて、大地の記憶そのものです。

本エリアは、伐株山や万年山の独特な地形が織りなす景観、慈恩の滝などの水辺、および各地に点在する豊かな自然環境を活かした領域です。

日常を忘れる癒やしの提供とともに、パラグライダーやトレッキングといった活動的な体験事業を充実させることで、写真撮影のみの立ち寄りから、滞在時間の延長と満足度の向上を図ります。自然景観エリアは資源が広域に点在するため、他の2エリアとの連携による周遊ルート設計が、その魅力を最大限に引き出す鍵となります。

4-4 主要領域（3つの柱）の概要一覧

| 領域名 | 主な対象資源 | 役割とめざすべき方向性 |
|-------------------------------|----------------------------------|---|
| 賑わいと交流の 町の玄関口 (豊後森エリア) | 豊後森機関庫を中心とする地域、JR 豊後森駅、道の駅童話の里くす | 観光の起点として来訪者を温かく迎え入れ、鉄道遺産の見学から周辺商店街での食事や買い物へと円滑に誘導する仕組みを整えます。滞在時間を延ばし、地域経済へ直接的な活力を生み出す結節点（ハブ）としての機能を強化します。 |
| 物語が息づく 歴史と文化 (森まちなみエリア) | 森のまちなみ、旧久留島氏庭園、久留島武彦記念館等 | 町内で最も長い滞在を実現している滞在型観光のモデルケースを目指します。城下町の情緒と童話の里の精神を深く伝えるため、ガイドによる案内や散策環境の充実を図ります。文化継承を支援する視点を持ち、知的好奇心を満たす観光エリアとして価値を確立します。 |
| 豊かな自然と 風景 (自然景観エリア) | 伐株山、万年山、慈恩の滝等 | 独特の地形が生み出す絶景を活かし、写真撮影だけでなく飲食や屋外活動を通じて過ごす楽しさを提供します。自然の中での休息と体験を組み合わせることで、満足度の高い滞在型観光を推進し、来訪者の心に残る風景体験を創出します。 |

第5章

基本方針と具体的施策

第3章で掲げた基本理念「観光資源を守り、活かす力で、地域経済を活性化する」を実現し、第4章で定めた3つの主要領域を有機的に機能させるため、以下の4つの方針に基づき具体的施策を展開します。

4つの方針は、それぞれが独立した取組ではなく、互いに連動して機能するものです。来訪者を迎える「人」を育て（方針1）、滞在したくなる「場」を磨き上げ（方針2）、その魅力を届ける「情報」を戦略的に発信し（方針3）、これらすべてを持続可能な形で次の世代へ引き継ぐ（方針4）。この4つの歯車がかみ合うことで、通過型から滞在型への転換が実現します。

5-1 方針1 おもてなしと人づくり（人材育成・受入環境）

どれほど優れた観光資源があっても、来訪者の心に残るのは最終的に「人」との出会いです。滞在時間を延ばし、来訪者の満足度を高める最大の鍵は、施設という基盤整備以上に「人」というソフトの力にあります。来訪者に「また、来たい。」と感じてもらうための接遇力の向上と、地域の魅力を深く語る人材の育成に注力します。

（1）多様な観光人材の育成

従来の観光案内の枠組みを超え、地域の資源を一体的に活用し新たな価値を創造し、事業を企画・運営できる「観光プランナー」や、自然体験等を安全かつ魅力的に指導する「インストラクター」など、役割に応じた多様な人材の確保と育成を進めます。

（2）地域全体で育むおもてなしの心

人材育成の効果を最大化するためには、観光事業者だけでなく、町全体の意識づくりが欠かせません。商工業、農林業者、および地域住民一人ひとりが、来訪者を温かく迎え入れる「観

光文化」を町全体で醸成します。住民が地域の魅力を再発見し、誇りを持って語れるようになることで、町全体の好感度を高め、再訪（リピート）へと繋がります。

(3) 安心・快適な受入環境の整備

人の力を支えるのが、受入環境という社会基盤です。キャッシュレス決済の導入等を検証し、来訪者の利便性向上と事業者側の業務効率化を同時に図ります。また、各観光施設等における適切な感染症対策を実施し、清潔で安全な「安心できる観光地」としての信頼を構築します。あわせて、多言語案内やバリアフリー化の推進により、国内外のあらゆる来訪者がストレスなく滞在を楽しめる環境を目指します。

5-2 方針2 資源と体験の磨き上げ・周遊の強化（コンテンツ・交通）

第2章の分析が示したとおり、本町の課題は「来訪者が少ない」ことではなく、「来訪者が滞在しない」ことにあります。「見るだけ」の観光から「参加し、体験する」観光へと質的転換を図るとともに、点在する拠点を円滑に結ぶ仕組みを整えます。

(1) 体験事業の体系化

3つの領域ごとに、地域の特性を活かした質の高い体験事業を開発・体系化します。「見るだけ」で終わる観光から「参加し、体験する」観光への質的転換を図り、各拠点での滞在時間の延長と満足度の向上につなげます。

(2) 拠点間の接続機能の強化

体験事業の充実と並行して、来訪者がそれらを実際に巡れる移動環境の整備が不可欠です。豊後森機関庫公園と道の駅童話の里くすを起点とし、森まちなみエリアや自然景観エリアへ来訪者が迷わず移動できるよう、距離感や所要時間を明示した案内標識の整備を検討します。あわせて、周遊を支える移手段の精査を行い、二次交通の利便性向上に努めます。

こうした取組を通じ、日本遺産を構成する資源や豊かな水辺の景観等、主要領域（3つの柱）以外の町内に点在する多様な魅力ある拠点への回遊を促す動線づくりにつなげていきます。

(3) 滞在を促す飲食・休息環境の整備

周遊の動線が整っても、各拠点で「足を止める理由」がなければ滞在にはつながりません。各拠点でゆっくりと腰を落ち着けて過ごせる空間や、玖珠町ならではの自然や歴史的景観を活かした飲食機会の創出を支援します。来訪者が「足を止める」仕掛けを意図的に増やすことで、地域での経済波及効果を図ります。

(4) 新しい滞在スタイルへの対応

一歩進んだ滞在の形として、仕事と休暇を両立させるワーケーションやブレジャー（出張休暇）、および二拠点居住といった新しい滞在スタイルに対応します。Wi-Fi 環境の整備や長期滞在者向けプログラムの提供を推進し、一時的な観光客に留まらない「関係人口」の創出と定着を目指します。

(5) 観光 DX の推進

デジタル技術を活用し、スマートフォン等でリアルタイムに町内の見所、飲食、移動手段を把握できる仕組みを研究します。体系化した体験活動をデジタル上でモデルコースとして提示することで、周遊の促進と来訪者の利便性向上を図ります。

5-3 方針 3 情報発信と広域連携（プロモーション・広域観光）

方針 1・2 で磨き上げた「人」と「場」の魅力は、届けるべき相手に届いてはじめて力を発揮します。玖珠町の魅力を、ターゲット層に届く最適な方法で戦略的に発信します。また、広域的な連携を強化し、観光ルートにおける本町の役割を確立します。

(1) 時流を捉えた戦略的なマーケティング

現代の観光動向や社会情勢を敏感に察知し、その時々「時流」に合わせた機動的なプロモーションを展開します。特にインフルエンサーを活用した発信や、SNS を通じた共感型マーケティングを強化し、潜在的な来訪者の関心に合わせた「刺さる」情報を届けます。

(2) 物語を伝える広報活動

マーケティングによる到達範囲の拡大に加え、発信する「中身」の質も高めます。単なる名所の紹介に留まらず、歴史、童話、住民の思いなど、玖珠町ならではの「物語」をデジタルコンテンツや多言語で整理します。公式サイトや SNS を通じて適切な時期に届けることで、来訪者の知的好奇心を刺激し、深い体験への意欲を高めます。

(3) 広域連携の強化

本町単独の発信力には限界があります。由布院や別府といった広域観光ルート上の主要観光地を訪れる旅行者に対し、本町への立ち寄り・滞在を促す誘客の仕組みを構築します。また、地理的な近接性に限らず、鉄道遺産や児童文化といったテーマを共有する自治体や、交流のある地域との連携を通じた相互誘客にも取り組みます。多様なつながりを活かし、広域周遊の流れのなかで本町が果たせる役割を確立していきます。

5-4 方針4 文化・暮らしとの共生と継承（持続可能性）

方針1～3の取組が成果を上げたとしても、それが住民生活を圧迫したり、貴重な資源を損なうものであっては意味がありません。本方針は、観光振興によって得られた活力を、地域の暮らしや文化の維持・継承へと還元する仕組みを整えるものです。観光が地域文化を消費するのではなく、その保存と継承を支援します。

(1) 観光を通じた文化継承の支援

地域に息づく祭りや伝統行事、文化は、住民の暮らしそのものです。これらを観光資源として活用する際には、その価値と営みを尊重することを前提とします。そのうえで、観光によって得られた収益や関心を、文化財の修復や伝統行事の維持へと還元する支援体制を構築します。地域住民が、観光の賑わいを自分たちの文化を守る力として実感できる循環を目指します。

(2) 住民理解と参画の促進

持続可能な観光には、住民の理解と主体的な関わりが不可欠です。観光による賑わいの創出が、地域社会の維持や住民サービスの向上にどのように寄与するかを可視化し、共有します。町民が主体的に観光地づくりに関われるワークショップや活動の場を設け、全町一丸となった

推進体制を支えます。

(3) 貴重な資源の適切な保存

「守り、活かす」の理念に基づき、将来にわたって自然景観や歴史遺産の価値を損なわないよう、環境保全と適正な利用のバランスを保つためのルールづくりや保全活動を推進します。

第6章

計画の推進体制

第1章から第5章にかけて、本町観光の現状分析、基本理念、重点領域、そして具体的施策を示してきました。計画の実効性を確保するためには、推進体制の確立が不可欠です。本章では、これらの施策を着実に実行し、成果を生み出すための推進体制を定めます。

観光資源を守り、活かす力を高めるためには、行政、事業者、地域住民がそれぞれの役割を明確に持ち、一体となって取り組む体制が必要です。官民が連携し、地域全体で観光地づくりを推進します。

6-1 協働による推進体制と役割分担

観光地経営を円滑に進めるため、各主体が「支える」「つなぐ」「動かす」という役割を明確に分担し、有機的に連携する体制を構築します。

(1) 行政が「支える」

町は、計画全体の進行管理や広域的な調整、観光基盤（道路、案内板、公衆トイレ等の施設面）の整備を担います。また、関係団体や事業者が活動しやすい環境を整え、公的な立場から観光地域づくりの土台を支えます。

(2) 観光を担う団体（観光協会等）が「つなぐ」

観光を担う団体は、行政と民間事業者、あるいは事業者同士を「つなぐ」役割を担います。地域内の情報を集約・整理し、効果的な情報発信や魅力的な体験プログラムの開発を支援します。各主体の連携を促進し、地域一丸となった取り組みの調整役を務めます。

(3) 観光関連事業者・地域団体が「動かす」

宿泊・飲食・物販・体験等の観光関連事業者や、地域のまちづくり団体は、来訪者への直接的なサービス提供や魅力のある取組の実施を担います。現場の知恵と活力を活かして実際の観光施策を「動かす」主体となり、来訪者の満足度向上と地域経済の活性化を直接的に牽引します。

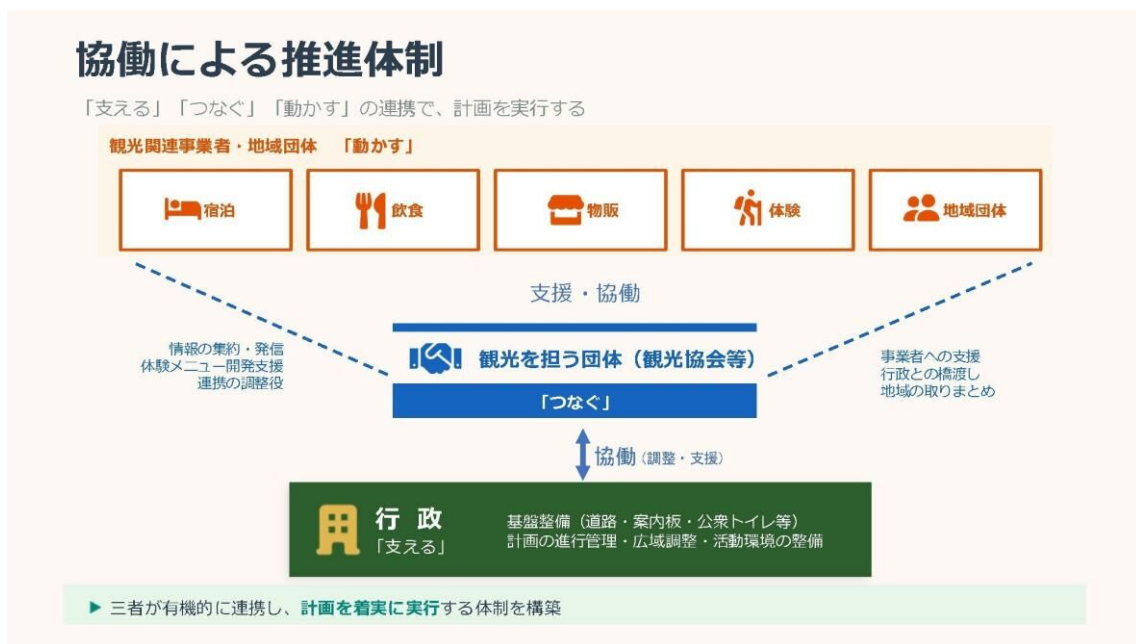


図 6-1 協働による推進体制

(4) 推進体制の運用

この3者の連携を実効性のあるものとするため、以下の運用を行います。

関係者間の方針共有：それぞれの組織が有する既存の会議体や協議の枠組みを活用しながら、施策の進捗や課題、計画の推進に必要な方針の共有を図ります。

実務レベルの連携強化：現場の課題や好事例を迅速に共有するため、関係者間で日常的に行っている情報交換や連絡調整の取組を継続し、さらに充実させます。

町民への情報発信：観光振興の取組や成果について、行政および観光を担う団体が連携し、町民への情報発信をします。

6-2 観光による経済循環の最大化

観光振興による効果を地域経済へ着実に波及させるため、第4章で定めた3つの主要領域（玄関口、歴史、自然）において、「見る、食べる、泊まる、遊ぶ、買う」という各要素をバランスよく充実させ、滞在の満足度を高めます。これにより、以下の5つの視点から地域内での経済循環を最大化させます。

観光経済を活性化させる5つの視点

| 視点 | 取り組みの方向性 |
|------------|--|
| 1. 来訪者数の維持 | 既存の来訪者を大切にしつつ、ターゲット層への戦略的アプローチにより安定的な集客を継続します。 |
| 2. 滞在時間の延長 | DXの活用や体験機会の創出、ワーケーション対応等により、町内に留まる時間を延ばします。 |
| 3. 消費単価の向上 | 質の高い付加価値体験の提供や、滞在時間の延長に伴う消費機会の増加により、客単価を向上させます。 |
| 4. 地域製品の活用 | 飲食店や土産品等において地元食材・製品の活用を促進し、地域内での仕入れ・消費の循環を強めます。 |
| 5. 再訪の促進 | おもてなしの向上と満足度の高い体験を提供し、再び玖珠町を訪れたいという仕組み（リピーター獲得）を構築します。 |

これら5つの視点を連動させることで、観光による収益が地元の生産者や事業者に広く行き渡り、その収益が次なる資源保全や住民サービスの向上へと繋がる好循環を構築します。

6-3 進行管理と評価（改善サイクルの確立）

観光の成長・発展には、計画の検証と分析が不可欠です。第3章で設定した目標指標を軸に、以下の取組でPDCAサイクルを確立します。

(1) デジタル統計を活用した継続的な現状分析

導入したデジタル観光統計を継続的に活用し、来訪者の動態や滞在時間の変化を客観的に把握します。経験に基づく知見を活かしつつ、数値に基づいた客観的な判断（EBPM）も取り入れ、

施策の精度を向上させます。

(2) 計画の点検と改善

毎年度、第3章で定めた指標の達成状況や施策の進捗を検証します。検証の結果は関係者間で共有し、社会情勢の変化や来訪者のニーズ、観光の動向に対応するため、必要に応じて施策の内容や優先順位を柔軟に見直します。常に最善の状態です計画を推進する PDCA サイクルを確立します。

具体的な点検の枠組みは以下のとおりです。

| 点検項目 | 点検の視点 | 時期 |
|----------------|---|-----------------|
| 重点指標 (滞在時間) | 拠点ごとの滞在時間の推移、50分目標および指標とする 8箇所平均10分以上の延伸への進捗 | 年度ごと |
| 周遊指標 | 測定手法の確立状況、拠点間移動率の変化 | 年度ごと |
| 経済指標 | 消費額推計手法の整備状況、推計値の経年変化 | 年度ごと |
| 各施策の進捗 | 方針1~4の個別施策の実施状況と効果 | 年度ごと |
| 計画全体の 中間評価 | 計画の折り返し時点での総合的な検証と見直し | 令和10年度 (中間年) |

(3) 情報の公開と活用

進捗状況やデータ分析の結果を、関係団体や事業者に対して適切に公開します。各団体・事業者がそれぞれの事業の改善や新たな取組の検討に役立てていただくことで、計画全体の実効性を高めていきます。

おわりに

2030年、この計画の最終年度を迎えたとき、玖珠町はどのような姿になっているでしょうか。

豊後森機関庫を訪れた人が、そのまま町なかへも立ち寄り、地元の食材を使った料理を楽しむ。森のまちなみを歩いた人が、城下町の物語に触れ、「また、来たい。」と感じる。伐株山の山頂で絶景を眺めた人が、この町の自然の豊かさを誰かに伝えたい。

そうした一つひとつの体験の積み重ねが、町に活力をもたらし、住む人の暮らしを支え、次の世代へ受け継ぐべき資源を守る力となる。それが、本計画が描く玖珠町の未来の姿です。

この計画は、行政だけのものではありません。観光に携わる事業者の皆さま、日々の暮らしのなかでこの町を支えている住民の皆さま、そして玖珠町を訪れてくださるすべての方々とともに歩む5年間の道しるべです。

観光資源を守り、活かす力で、地域経済を活性化する。

この理念のもと、玖珠町の観光振興は歩み始めます。

玖珠町商工観光政策課

玖珠町観光振興基本計画

令和8年3月

《編集・発行》

玖珠町商工観光政策課 観光振興班

〒879-4492 大分県玖珠郡玖珠町大字帆足 268-5

電話：0973-72-7153／e-mail：syoko@town.oita-kusu.lg.jp
